



HACK

13

侵入

KAI SHIGIHARA

13 侵入

(ドア横にあるキーパッド。エンターキーの上に指をおいて)

レスリーは言われたとおりにした。すると、ジュリアスが集中を強め、レスリーの指先に何か熱い流れのようなものを流していくのを感じた。

(いいね。外すよ)

ぴ という軽い音がして、扉が静かに開いた。

(すごい)

レスリーは、ジュリアスの力を目の当たりにするのは初めてだ。知識として知ってはいたが、こうして見ると本当にすごいと実感した。

(もう少し大きなラインに取りつこう。部屋を出て右へ。一つ目の角を右)

レスリーは周囲を見回して人影がないのを確認すると、廊下へ出た。指示通り、右へ進み、右へ曲がる。

エンターキーに触れただけで研究所内の地図まで把握したのか、ジュリアスの指示に間違いはなかった。

(左手の部屋に入ろう)

(ここも鍵がかかっている)

(エンターキーに指先を)

さっきのように指先をあてると、今度は触れたと同時にドアが開いた。

そこは、何かの実験室のモニタールームのようだった。室内は狭く、細長い。長いテーブルに、端末とモニターが整然と並んでいた。滅多に使われない部屋らしく、小物のペン一本見当たらない。

壁の一面は大きな硝子をはまっていて、硝子の向こうには何かの実験をするのか、何もない広い空間があった。

(ここに立てこもろう。証拠を送信すれば、レイノックス軍とドミニクが突入する手はずだ。それを探すよ)

(わかった)

(端末の電源いれて)

(了解)

端末の電源を入れると、モニターもオンになってしまった。モニターの光が外に漏れると、ここに人がいることがわかってしまう。レスリーはモニターの電源をおとすと、自分の姿も出来るだけ外から見られないように、ドアから死角になる場所に小さくうずくまる。

(このシステムを乗っ取れたら、監視カメラやドアロックも俺の支配下になるから、この部屋

に誰かが侵入してくることはない。それまでしばらく、周囲には気をつけておいてくれ)

(でも、ここにいないと、あなたが困るでしょ?)

(大丈夫。一度ラインをつなげてしまえば、多少の距離は問題なくなる)

(それって、どれぐらいかかるの?)

(すぐだよ。君にならきっと、わかるはず)

愛情や庇護欲だけじゃない、強い信頼も、ジュリアスから伝わってくる。仕事のパートナーとして、ジュリアスが認めてくれているのを感じて、嬉しく思った。

レイノックスでの任務は、ジュリアス一人で片づけてしまい、レスリーは何の手助けもできなかった。あの三日間、ジュリアスとレスリーは対等に接していたのに、任務となると置いてけぼりだったのが、寂しかったし、悔しかったから。

(さあ、レスリー。始めるよ)

(わかった)

どうやらレスリーが機械に触れていた方がよさそうなので、端末のCPUが入っているボックスの上に手を乗せる。そして、ジュリアスへと意識をむければ、また指先から熱い流れがどこかへと流れっていった。

感じたのは、闇だった。深い深い闇。でも、冷たくもないし、怖くもない。ジュリアスの深層に潜っていくような、そんな感じがした。ジュリアスと、とても深いところでつながっていると感じた。

そして、闇の中を光の筋が流れ始める。流れ星のようなそれは、次第に数を増し、やがて闇は光にとって代わられた。

(つながったんだ)

理屈ではなく、そう感じた。ジュリアスの意識が、一気に拡散していく。レスリーを中継して、それによって力を増し、自由に広がっていく。

レスリーはボックスの上に置いていた手をおろすと、ほっと息をついた。

これできっと大丈夫。ジュリアスはケビンのシステムを攻略して、レスリーに脱出の道を作ってくれるだろう。

レスリーは膝を抱えて小さくなって座る。それは心細いからではなく、ちょっぴり寒かったから。心の中は、すぐそばにジュリアスを感じ、ぽかぽかと暖かく満たされていた。

一方、ドミニクは、レイの会社が所有する船で、待機していた。

ジュリアスは集中したいといって、個室で一人、横になっている。何かあると困るので、ベッドに横になっている姿は監視カメラでチェックしているが。

どうやら、今のところ順調らしい。ドミニクの前にあるノートパソコンは、すでにジュリアスの支配下にあり、そのモニターには時々現状報告的なメッセージが表示される。最後のメッセージは、「これから攻略開始」。しばらく時間がかかりそうだ。

「隊長、レイノックス警察から連絡入ってますが」

隣の通信室から部下の一人が顔を出す。

「すぐ行く」

レイノックス警察は、すでに動いてくれていて、一度、あの研究所を訪問もしてくれていた。なにしろ、狙撃されたのが、現軍司令官の息子なのだ。血痕という動かぬ証拠もあるので、対応は迅速だった。だが、ケ빈は不在だと突っぱねられた。

「現在、本社の方にも人をやって、ケビン・ロイドの行方を探しています。どうやら、数日前に研究所を出ているらしいことはつかめました」

衛星回線を使った、テレビ電話のモニターに映ったのは、まだ若く、と言ってもドミニクより年上の三十台後半ぐらいだろうか、見るからに有能そうな警察官だった。

「こっちも、数日前にケビンの入国を確認しています。現在、国内での潜伏先など調査中です」

「凶器の銃は特定されましたか？」

「いいえ、まだです。それよりも、ケビンが乗ったと思われる飛行機の行く先の特定はどうになりましたか？」

「難しいですね。入国した空港で小型機に乗り換えたのはわかっていますが、このタイプの機体については、わが国では位置情報信号の発信を義務付けていません。フライト・プランの提出もです。移動が近距離であったことは間違いありませんが、研究所のある島だったと確定は出来ません」

有能そうだが、少々頭も堅い。もしかしたら、前線の経験はすくないかもしれない。これだから若いものは使えないと、二十八歳のドミニクは内心で舌打ちした。

「ケビン・ロイドには、狙撃での逮捕状と、伯爵令嬢誘拐犯の疑いもある。レイノックス警察には、ありとあらゆる手を使って、ケビン・ロイドの所在を突き止めて頂きたい。狙撃の方はともかく、誘拐の方は一刻一秒を争う」

「了解しました」

脅しも気持ちを込めて、ドスをきかせてそう言ってやれば、若い警察官は背筋を伸ばして最敬礼すると、そそくさと通信を切ってきた。

「協力相手を脅してどうするんですか」

と、通信を横で聞いていたドミニクの部下が、呆れたように言う。

「役に立たない奴は嫌いだ」

「あちらさんも十分に頑張ってますよ。あなたの『役に立つ』基準が高すぎるの、自覚ありますか？」

「ないね。俺の部下は全員優秀だし。この手のストレスとは、生憎、無縁でね」

ドミニクの部下は更に呆れた顔になったが、本当のことだ。人を見る目と、青田買いの才能がある自信はある。だが、忍耐力への自信はあまりない。

「急げよ、ジュリアス」

ジュリアスの送ってくれる証拠がなければ、突入できない。

ドミニクは通信室を出ると、隣室のパソコンの前へと戻った。

その頃、ジュリアスは、想像していたよりも容易に、ケビンの作成したシステム内に侵入を果たしていた。

(すごく近い)

まるで、自分自身が、研究所内にいるかのようだった。

自分の力が、なぜ物理的な距離に大きく左右されるのか、相性のいい人物を中継してその距離を縮めることが出来るのか、そのメカニズムはわからない。解明しようとも思わないが、レスリーが今までで一番相性のいい相手だというのは、間違いない。レイは、理屈ではないと言っていたが、その通りかもしれない。レスリーとは、最悪だった初対面の時から、最高のパートナーになれるだろうという予感があった。恋人になれた今は、お互いを思う気持ちが、相性の良さをさらに高めてくれているような気がした。

ジュリアスにとって、精巧につくられたコンピューターシステムは、性格や知能を持った人間のようなようだ。作成者の性格や知能の高さが反映されることが多い。そのシステムによって、制圧するまで圧力をかけることもあれば、仲良くなって思うままに動かすこともある。ケビンのシステムは、最初から制圧することしか考えていなかった。

じわじわと、気付かれぬように、まずは末端から乗っ取っていく。足の指先から、手の小指から、一つづつ丁寧に。

(お、いいね。カメラだ)

しばらくすると、研究所内部の監視カメラのシステムを乗っ取った。これで、ジュリアスは目を手に入れることが出来たわけだ。

すぐに、研究所内を見まわして、ケビンの姿を探す。彼は、自分の研究室にいた。どうやら、レイノックス本土にある本社からの連絡を受けているようだった。その写真を、まず一枚。だが、これでは研究所内にいる証拠としては弱い。ジュリアスは、カメラが撮影した映像が残っていないか探り、すぐにビデオの存在を見つける。ケビンとレスリーがこの島に到着した頃の時間をさぐれば、車椅子で小型機から降りてくるケビンの姿と、屈強そうな男に抱えられた、明らかに意識のないレスリーの姿を見つけた。この映像を、タイムスタンプ付きで写真にすると、ジュリアスはドミニクの元へと送信した。外部への連絡回線は真っ先に確保したので、ケビンが送信に気付くことはない。

(ドミニクが来る前に、完全制圧しとかないとな)

立てこもられたら面倒だし、レスリーを一刻も早くケビンの支配下から救い出したい。それに、ケビンに気付かれたら面倒だ。

ジュリアスはシステムの中枢を乗っ取るために、集中力を高めていった。